

シニア社会学会
エイジレスフォーラム第14号(2016年6月)抜刷

「伴侶動物との暮らし」を活用した
「高齢者が幸せに暮らせる社会システム」の提案

富 永 佳与子
西 澤 亮 治
湯 木 麻 里

「伴侶動物との暮らし」を活用した「高齢者が幸せに暮らせる社会システム」の提案

富 永 佳与子・西 澤 亮 治・湯 木 麻 里

要 約

日本は、これまでに経験のない高齢化社会を迎えている。そのような中、「伴侶動物と暮らす高齢者は、日常生活に満足している人が多く、不満な人がほとんどない」というアンケート結果が出た。「飼い犬と見つめ合えば、幸せホルモンが出る」という研究結果もある。一方、自身の健康にも良いと感じているにも関わらず、年齢から、次の飼育を諦める高齢者。動物管理センターの統計では、犬の引き取り事由は、飼い主の死亡・入院が第1位であり、病気が平癒しても、伴侶動物のいない家に帰ることになる実態もある。そこで、地域包括支援の仕組みの中に、「伴侶動物との暮らし」を活用し、動物の専門家の関わりによる自助・共助、保健福祉局の中での人間の福祉部署と動物に関わる部署の連携による公助を設定した社会システムを創出することにより、「伴侶動物と暮らす幸せな高齢者」を核とした、楽しく、優しく、温かなコミュニティ構築を図る提案について述べる。

キーワード：伴侶動物との暮らし、社会システム、コミュニティの構築

Proposal for a Social System through which Elderly People can Live Happy Lives by Utilizing the Idea of 'Life with Companion Animals'

Kayoko Tominaga^{a)}, Ryoji Nishizawa^{b)}, Mari Yuki^{c)},

a) Board Chairperson, Public Interest Incorporated Association Knots/ Mukogawa Women's University

b) Secretary-General of the Japan Association for Promoting Harmonization Between People and Pets

c) Veterinarian

Abstract

Our society faces both an increasing number of single-member households and a rapidly aging population. Survey results showed that elderly people who live with companion animals are satisfied with their daily lives and very few are dissatisfied'. Also, other research shows that hormones related to feelings of happiness are released when dog owners make eye-contact with their dogs. Elders themselves feel it is good for their health to live with their companion animals, but they often wind up keeping the animals. The top reason given for sending companion animals to animal control centers is the pet owners' death or hospitalization'. When owners finally leave the hospital, they return to an empty, lonely house.

We discuss the building of a happy, gentle, and warm community, in which elders live happily

with their companion animals, through the creation of a social system that utilizes the idea of living with animals within integrated community care systems and establishes self- and mutual-support through companion animal specialists as well as public assistance through the joint efforts of the human and animal welfare sectors.

Key words : The Life with Companion Animal, Social System, Building Community

I. はじめに

日本は、世界に先んじて高齢化社会を迎えている。国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、65歳以上の人口は、2035年には3人にひとりを上回り、2060年には、39.9%になる（国立社会保障・人口問題研究所、2012）。多くの高齢者は、健康を維持し、他人に迷惑を掛けず、穏やかに暮らすことを望むことだろう。平成26年度（2014年）内閣府高齢者の日常生活における意識調査結果によると、60歳以上の高齢者の日常生活の将来で最も不安なことは、自身の健康であり、「自分や配偶者の健康や病気のこと」67.6%、次いで「自分や配偶者が寝たきりや身体が不自由になり介護が必要な状態になること」59.9%、日ごろ特に心がけていることも、「健康管理」55.6%が一位である。この調査では、夫婦二世帯が40.1%、本人と子の世帯が25.1%、本人と子と孫の世帯が10.4%、単身世帯が12.3%、本人と親の世帯が7%であるが、「頼れる人がいなくなり一人きりの暮らしになること」を不安に思う人が全体で23.4%あり、今は二人であっても、いずれどちらかが先立ち、単身世帯となることを想定しやすい夫婦二世帯では29.7%と、単身になることへの不安も高くなっている（内閣府政策統括官（共生社会政策担当）、2015）。

II. 高齢者にとっての伴侶動物

1. 伴侶動物に対する意識の変化

そのような中、注目したいのが、伴侶動物（家庭動物）の存在である。現在は、用語として家庭動物を使うことが多いが、本論では、高齢者のパート

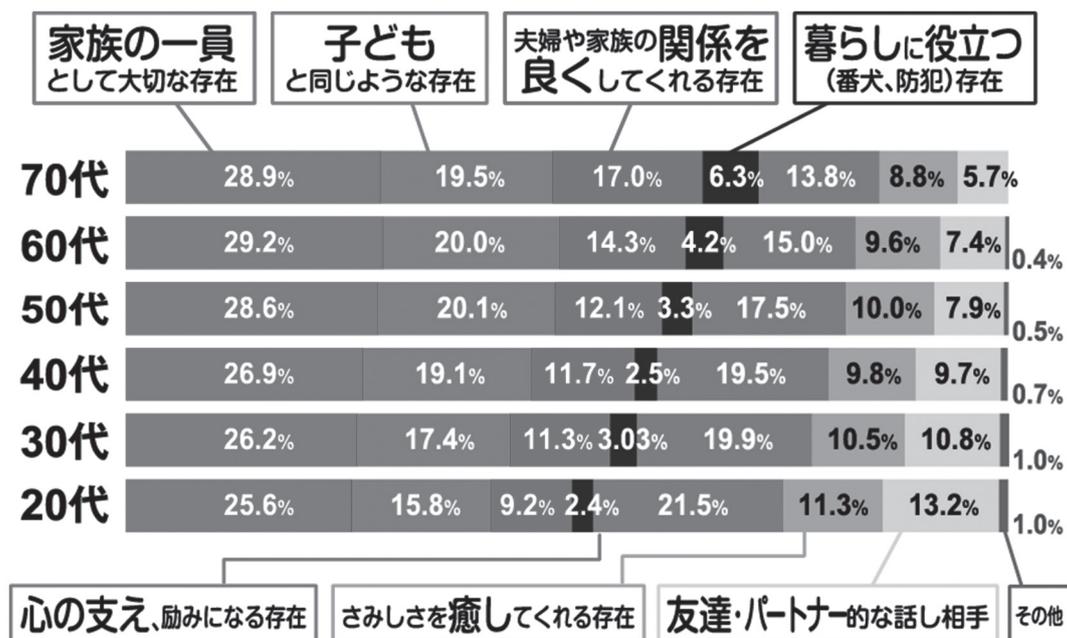
ナーとしての存在という意義に鑑み、伴侶動物を使用する。

1999年「動物の愛護及び管理に関する法律」（環境省、2014）の26年ぶりの改正では、それまで法律上は単なる「モノ」であったものが「動物は命あるもの」とされ、法律の名称も「保護及び管理」から「愛護及び管理」となり、以降、5年毎の見直しがなされている。「命あるもの」となった伴侶動物には、飼い主の終生飼養の責任も明記されている。そのような国としての意識転換もあり、現在では、伴侶動物は、家族の一員としての認識をされ、2012年の同法改正では、災害時の同行避難にも言及されている（環境省、2013）。

また、伴侶動物に対する一般的な見方も、平成22年9月の内閣府大臣官房政府広報室世論調査によると、「ペット飼育の好き嫌い」では、「好き」とする者の割合が72.5%（「大好き」23.4%＋「好きなほう」49.1%）、「嫌い」とする者の割合が25.1%（「嫌いなほう」21.8%＋「大嫌い」3.3%）となっている。前回調査（平成15年7月）と比較すると「好き」（65.5%→72.5%）とする者の割合が上昇し、「嫌い」（31.7%→25.1%）とする者の割合が低下しており、伴侶動物に関する好感度は上昇している（内閣府政府広報室、2010）。

2. 飼い主にとっての伴侶動物

飼い主にとっての伴侶動物の存在は、2014年6月に西澤らがインターネットにより行った調査によれば、図1に示す通り、飼い主にとっては、家族・友人といった存在であり、実態調査においても、個々人にとっての伴侶動物の存在の重要性は、無視できないものとなってきている（西澤、2014）。



【図1】「ペットはどんな存在？」

調査期間：2014年6月23日～30日
 一般の犬・猫の飼い主 5,387名にインターネットにて調査
 西澤亮治, 2014, 「飼い主の今を探る」, ICAC KOBE 2014 記録集

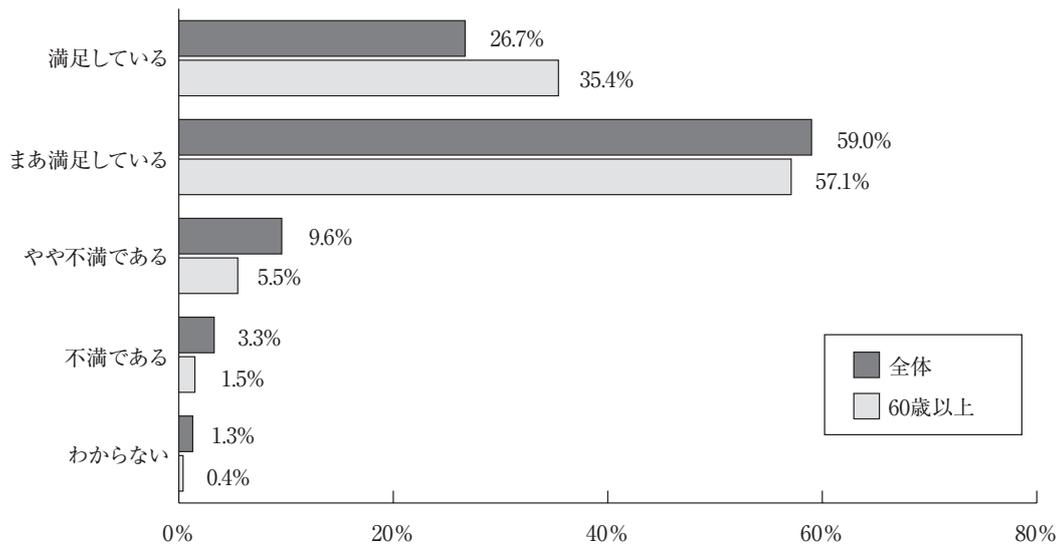
3. 伴侶動物との暮らし

2015年7月、特定非営利活動法人動物愛護社会推進協会「ペットと暮らす飼い主様の意識調査アンケート」では、西澤が、大変ユニークな取り組みを行っている。「平成26年度（2014年）内閣府高齢者の日常生活における意識調査結果」（内閣府政策統括官（共生社会政策担当），2015）を参照し、伴侶動物と暮らす飼い主を対象に、伴侶動物の要素を加えて、インターネットを通じてアンケート調査を行った（西澤，2015）。内閣府調査は、平成26年12月4日～12月26日に郵送により実施され、3,893人（男1,887人 48.5%・女2,006人 51.5%）の有効回答を得ている。

図2に示す通り、伴侶動物と暮らす60歳以上の飼い主の一般的な生活満足度は、非常に高いという結果が出た。特徴的なのは、内閣府調査と比較すると「まあ満足している」という回答には差がないが（内閣府調査：56.2%、伴侶動物の60歳以上の飼い主：57.1%）、「満足している」という回答に対しては、内閣府調査：12%に対し、伴侶動物の60歳以上の飼い主：35.4%と23.4%もの差がついている点である。伴侶動物の飼い主全体でも26.7%であり、60歳以上

の伴侶動物の飼い主の日常生活の満足度の高さが際立っている。更に、「まあ不満である」「不満である」という日常生活に不満を持つ人の割合は、内閣府調査では、28.8%、およそ3割に達しているのに対し、伴侶動物と暮らす60歳以上の飼い主では、7%に過ぎず、日常生活に不満が少ないという結果が出ている。性別では、有意な差はなかった。

平成21（2009）年の前回の内閣府調査では、「満足している」と答えたのは、26.4%あり、14.4%も満足している人が減っている。残念ながら、伴侶動物の飼い主の生活満足度についての以前のデータがないため、こちらについては、変遷が不明であるが、まだ、伴侶動物を飼養する余地があるという点では、経済的に余裕があり、満足度が高くなる傾向がある可能性も残されている。住居の属性では、一戸建て及び分譲マンションでは、同様の結果であるが、賃貸マンションに住む60歳以上の伴侶動物の飼い主では、満足が約12%、やや満足が76.5%となる。但し、サンプル数が少ないため、参考値としたい。平成26年度（2014年）内閣府調査における住居形態別では、持ち家でも「満足している」が13.3%、賃貸では3.5%で、やはり伴侶動物飼育世帯の満足度



【図 2】「日常生活全般の満足度」

調査期間：2015年6月26日～7月2日

一般の犬・猫の飼い主 3,987人にインターネットで調査（内60歳以上 453人、女性：304人、男性：149人）

特定非営利活動法人動物愛護社会化推進協会「ペットと暮らす飼い主様の意識調査アンケート」

西澤亮治,2015,「高齢ペット飼育者の意識調査」

は相対的に高いように思われる。

しかし、日常生活に「満足している」人が多いだけでなく、「不満である」人がほとんどいないということは、大変興味深い結果である。

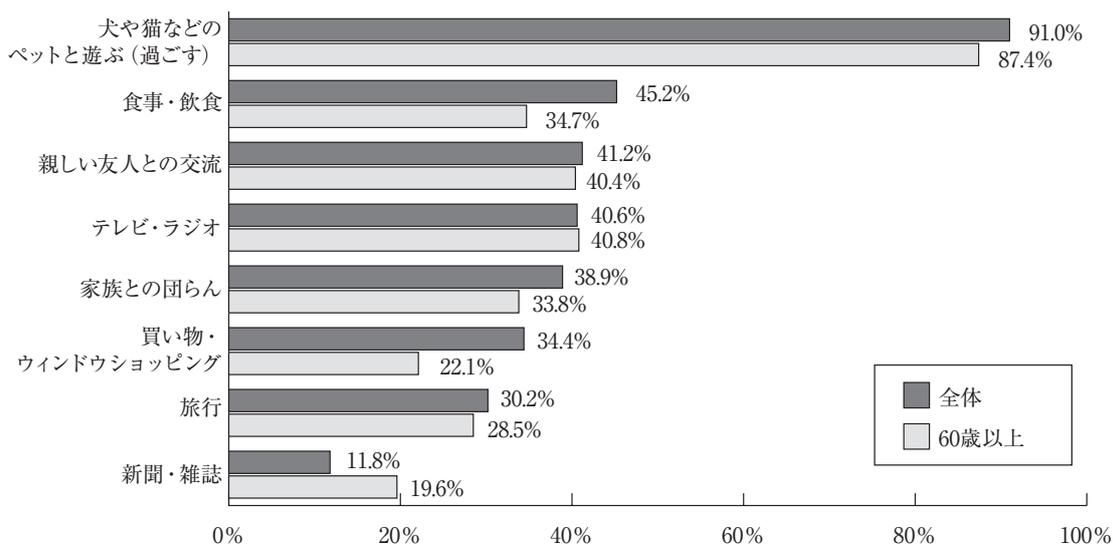
この調査では、更に、「普段の生活で楽しいと感じていること」も質問している。

内閣府の調査と明らかに差が見受けられるのは、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌を楽しいと思う割合が、内閣府調査では高く、伴侶動物と暮らす飼い主は、それほどでもない。テレビ・ラジオを楽しいと感じるのは、内閣府調査では、82.2%に対し、図3にあるように、伴侶動物と暮らす60歳以上の飼い主は、40.8%、新聞・雑誌を楽しいと感じるのは、内閣府調査では、55.0%に対し、伴侶動物と暮らす60歳以上の飼い主は、19.6%である。「犬や猫などのペットと遊ぶ（過ごす）」については、内閣府調査では、15.3%に対し、伴侶動物と暮らす60歳以上の飼い主は、87.4%が楽しいと感じることとして選択している。

伴侶動物の飼い主に向けたアンケートでは、「ペットの暮らしで良い面」の設問もある。「癒される」「毎日が楽しく過ごせる」「家庭や夫婦間が和や

かになる」「気持ちが落ち着く」「心が通じ合うように思える」「ストレスを解消してくれる」「寂しさが解消される」「自分自身の健康に役立つ」という回答の中で、その他の回答は全体より低めであるが、ひとつだけ60歳以上の高齢者の飼い主だけに突出して高い回答がある。それは、「自分自身の健康に役立つ」というものである。全体では、44.8%であるが、60歳以上では、58.1%になる。どのような形で役に立つのか当てはまるものを選んでもらったところ、以下ようになった。

- ①「よく歩くようになった（朝夕の散歩など）」
86.7%（全体：76.1%）
- ②「ペットといると毎日楽しく過ごせる」
84.8%（全体：91.8%）
- ③「気持ちがやすらぐ」 64.6%（全体：76.7%）
- ④「健康でいようという気持ちがより強くなった」
61.5%（全体：61.9%）
- ⑤「朝、早く起きるようになった」
55.5%（全体：54.6%）
- ⑥「生活が規則正しくなった」
55.1%（全体：55.5%）
- ⑦「ペットを通して新しい友人が増えた」



【図3】「普段の生活で楽しいと感じていること」

調査期間：2015年6月26日～7月2日

一般の犬・猫の飼い主 3,987人にインターネットで調査 (内60歳以上 453人、女性：304人、男性：149人)

55.1% (全体：52.0%)

⑧「笑う時間が増えた」53.2% (全体：66.2%)

このように、①「よく歩くようになった」の項目高くなっており、他に⑤「朝、早く起きるようになった」、⑦「ペットを通して新しい友人が増えた」もわずかながら高くなっており、60歳以上で全体を上回るのは、この3点である。

この効果を鑑みると、散歩に出掛ける犬の飼い主が、より、その健康効果を感じていることが推測される。内閣府調査の結果を合わせて予測すれば、伴侶動物と暮らす飼い主は、少なくとも1日に1回以上、散歩という外出する理由があり、その理由のない人に比べれば、体を動かしたり、人と話したりといった外的刺激を受ける機会が多くなっている。外出する理由のない高齢者は、在宅が長くなり、楽しみも、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌という、「動かず、話さず」のメディアに多くを頼ることとなっているのであろう。しかし、高齢者にとって、体を動かさないことは、身体機能維持の観点からも望ましくなく、コミュニケーションのない生活は、心身の健康にも悪影響を及ぼしかねない。

猫などの室内飼育の場合でも、給餌、排泄など一定の伴侶動物の世話があり、規則正しい生活のリズムもでき、伴侶動物の存在により、伴侶動物に話し

掛けるといった補完的なコミュニケーションも可能である。自分以外の生き物が存在し、極端な言い方になるが、その生死に責任があり、頼られている感覚は、特に高齢の単身者にとっては、自身の存在意義を確認できるということがある。そのような飼い主の意欲が、④「健康でいようという気持ちがより強くなった」が6割を超えていることに示されており、高齢になっても、その気持ちは、維持されている。

伴侶動物と暮らす飼い主のアンケート結果の方が、内閣府調査の結果から受ける一般的な高齢者の生活イメージより、前向きで活動的な暮らしを送ることができている印象を受ける。

4. 犬と幸せホルモン

麻布大学の長澤・菊水らの研究によれば、幸せホルモンと呼ばれる「オキシトシン」が、飼い犬に見つめられることによって、飼い主の体内に分泌される。飼い犬の方にも、その後の飼い主との交流によってオキシトシンが分泌される (Nagasawa, et al., 2015)。オキシトシンには、点鼻剤による対人コミュニケーション障害の改善実証研究もあり、対人関係において、他者と信頼関係を築きやすくなる効果も言われている (Watanabe, et al., 2012)。

哺乳類一般に、子のアタッチメント行動（鳴き声や吸乳行動）を受けた母親にはオキシトシンの分泌が促進され、母性行動が上昇し、この母性行動を受容した子にも、オキシトシンの分泌が促進され、さらなる接触を求めるといふ母子関係性があり、乳児は、特徴的に、アタッチメント行動として、視線を使う（Nagasawa, et al., 2012）。

このヒトの母子間で成立している視線によるアタッチメント行動とオキシトシンとの正のループが、飼い主と飼い犬の間にも存在し、生物学的な絆が形成されるという。ヒトと犬は、一般に1万5千年前から共生関係が始まったとされているが、同研究では、オオカミでは、この関係性は見られず、進化の過程で、ヒトと犬が獲得したものと推測している。

このように、少なくとも犬との関係性については、生理学的にも、その親密性が明らかにされており、伴侶動物は、生きていく限り「子ども」と同じメカニズムでの関係性を維持することになる。猫については、今後の研究を待たねばならないが、人間の家畜化の歴史を考えれば、特に、犬と猫については、長い歴史の中で、ヒトが伴侶動物として暮らすことを選び取った存在であり、生理学的影響は、今後、解明されていくと考えている。

このような生物学的な共生関係を知れば、前述の伴侶動物と暮らす飼い主の前向きなアンケート結果についても、得るべき結果と推測される。

Ⅲ. 高齢者を襲う危機

1. 空っぽの家に帰る現実

これまで述べたような結果を見れば、高齢者が伴侶動物と暮らすことは、良いことが多く、動物と暮らすことが好きなら、どんどん一緒に暮らして頂ければ良いと思われるかもしれない。しかし、多くの高齢者に関わる問題と同様に、ことは、それほど簡単ではない。

神戸市動物管理センターの統計によれば、平成25年度の犬の引き取り理由の第1位は、所有者の死亡・病気であり、全体の36.4%を占める。死亡と病

気の割合は、1：3であり、この75%に及ぶ病気で手放した飼い主は、病気が平癒しても、伴侶動物の居ない空っぽの家に帰らねばならない。このような犬の引き取り時の平均年齢は、9.2歳であり、残念ながら、譲渡される可能性も低くなり、安楽死となる場合も考えられる。因みに、施設入所は、引き取り理由第2位の飼い主の転居に含まれる。

猫の場合は、引き取り理由の第1位は、過繁殖であるが、第2位が飼い主の死亡・病気で、全体の26.3%を占め、その死亡と病気の割合は、1：2である。猫の飼い主に於いても、70%近くが、伴侶動物の居なくなった家に帰らねばならない。

このような背景もあり、伴侶動物と暮らす飼い主は、しばしば入院を拒否し、必要な治療を受けようとする場合があり、病気が重篤化するケースも想定される。しかし、病気が平癒しても、特に高齢単身者である場合は、伴侶動物の居なくなった空っぽの家に帰り、自らが健康を損ねた故に、長年一緒に暮らした伴侶動物が若しかしたら安楽死処分となった可能性があるという現実に向き合うこととなるのは、どんなに残酷なことであろうか。残念ながら、この分野では公助はなく、自助、共助の方策が取れなければ、人生の最後に、このような立場に追い込まれる人が少なからず居るのが、今の日本の現状である（湯木, 2014）。

2. 高齢者の不安

このような不安を反映してか、前述の2015年7月、特定非営利活動法人動物愛護社会化推進協会「ペットと暮らす飼い主様の意識調査アンケート」によると、現在飼っている伴侶動物が亡くなった後、新たにペットを飼いたいかという設問では、以下のような回答を得られた。

- ①「わからない」 全体：45.3% 60歳以上：25.4%
 - ②「思う（飼う）」 全体：26.8% 60歳以上：15.3%
 - ③「飼いたい但实际上には飼わない」
全体：21.5% 60歳以上：48.5%
 - ④「二度と飼わない」
全体：6.3% 60歳以上：10.8%
- 60歳以上では、飼わないことを選択する人の割合

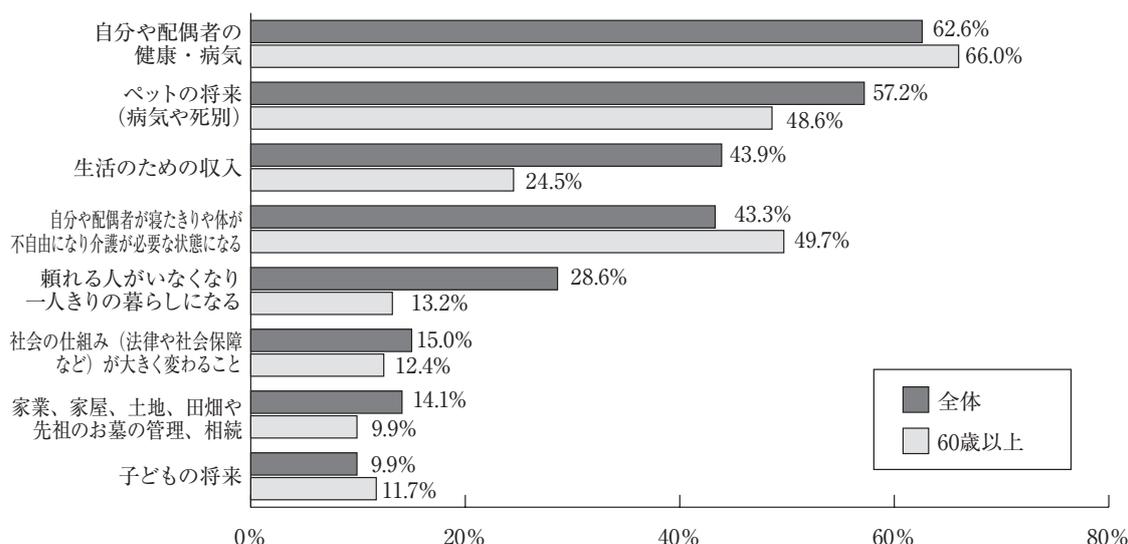
が大きく増加する。「Ⅱ. 3. 伴侶動物との暮らし」で示したような、大変前向きで好ましく、楽しいな伴侶動物との暮らしへの希望を、止めてしまうものは何なのであろうか。

「飼いたい但实际上には飼わない」と答えた60歳以上の飼い主の98.2%、「二度と飼わない」と答えた60歳以上の飼い主の77.6%が、飼育しない理由として「自分の年齢（最後まで世話ができそうにない）」と答えている。

図4は、将来への不安についての前述の内閣府の調査回答の項目にペット（＝伴侶動物）を入れた設問としたものであるが、自身と配偶者の健康の次はペットの将来であり、「生活のための収入」（内閣府調査：33.7%、伴侶動物の60歳以上の飼い主：24.5%）や「子どもの将来」（内閣府調査：28.7%、伴侶動物の60歳以上の飼い主：11.7%）を上回っている。内閣府調査では、23.1%であった「頼れる人がいなくなり、一人きりの暮らしになる」は、伴侶動物の飼い主全体では28.6%あるにも関わらず、60歳以上の伴侶動物の飼い主では13.2%と低くなっているのは、興味深い。伴侶動物と暮らす高齢者にとっては、巣立ち自立した子どもより、現在の家族の一員で、自らが責任を負っている伴侶動物の存在が大きいのである。（西澤，2015）

3. 高齢者の望むサービス

高齢者が望むサービスについても、調査が行われている。前出の2014年6月に西澤らがインターネットにより行った調査によれば、60歳以上の飼い主が有料でも利用したいと答えたサービスは、「外出や旅行の時に一時的に預かってくれる」49.7%、「飼育できなくなった時、信頼できる新しい飼い主を探してくれる」28.5%、「獣医師が定期的に自宅へ来て診察や治療をしてくれる」16.1%と続き、全ての年代に対しての同じ設問への回答内容とほとんど差はなかった。ニーズはほぼ同じであるが、高齢者は、年齢を重ねていく中で、頼れる人や相談相手が徐々に減っていくことが想定され、自助、共助の中で利用出来る方策も徐々に減っていくことが推測される。伴侶動物の飼育者には、公助のシステムはなく、図4のペット（＝伴侶動物）の将来への不安は、この分野での、利用出来る方策が限定されていることから、万が一の場合への対応を準備しきれない飼い主の不安が大きく出ているのではないかと（西澤，2014）。



【図4】「将来、どのようなことに不安を感じますか？」

調査期間：2015年6月26日～7月2日

一般の犬・猫の飼い主 3,987人にインターネットで調査（内60歳以上 453人、女性：304人、男性：149人）

IV. 高齢者が幸せに暮らすコミュニティ

1. 高齢者包括支援システムの活用

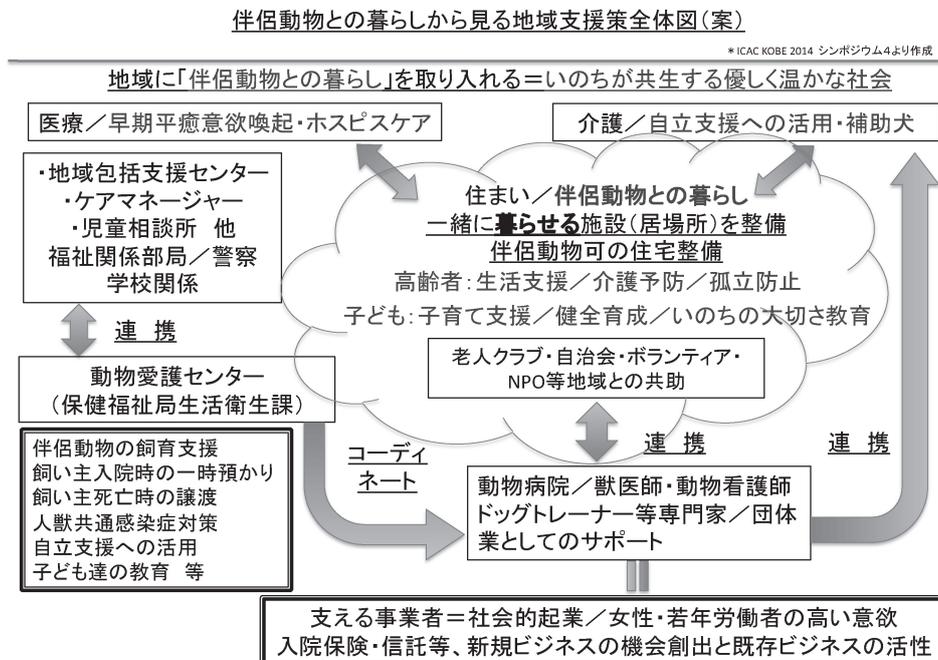
西澤は、このような高齢の伴侶動物飼育者への自助、共助のシステムを構築するために、地域包括ケアシステムに、動物医療等、伴侶動物の専門家が積極的に関わり、参画していくことで、伴侶動物の高齢飼い主の不安を払拭し、幸せに暮らす社会へ貢献できるのではと提案した。

これを元に、富永が立案した公助を組み込んだ社会システム案が、図5である（富永，2015）。

地方自治体に於いては、人間の福祉を担当する部署と動物に関わる部署は、共に保健福祉局といった名称で、同じ局に属していることが多い。動物に関わる部署（生活衛生課等）では、出先に動物愛護（管理）センターもあり、ここで動物の引き取りや相談により、高齢者の問題が見出される場合もある。一方、人間の福祉の場面でも、課題を抱えた高齢者に共に暮らす伴侶動物がある場合、解決すべき課題となる。これらの部署は、連携するシステムを有して

いないが、同じ局内であり、今後連携構築を図れる可能性は、十分にある。動物に関わる専門家は、動物取扱業として、都道府県、政令指定都市、中核市の動物衛生担当部署に登録もされており、平日頃の協働関係も存在する。また、飼育者のプライバシー保護などの観点からも、公的機関が公助として、ある種のコーディネート機能を果たせることが望ましい。

このような仕組みの中では、誰が費用負担をするかということがある。勿論自助努力は必要であるが、例えば、現在ある犬の登録のシステムを再整備し、犬の生涯1度だけ、飼い始めの時に登録する方法から、飼育支援を視野に入れ、登録を毎年更新することとし、更新費用を徴収し、公助システムの運営費用に充てることは、先ず、考えられる。これは、同行避難などの災害対策や孤独死防止に代表される高齢者の見守りの観点からも有用である。であれば、対象を猫に広げることも必要になるであろう。また、伴侶動物の世話は、介護保険の生活支援サービスには未だ含まれていない。しかし、生活満足度の高さを示すアンケート結果や、解明されていく生



〔図5〕「伴侶動物との暮らしから見る地域支援策全体図(案)」

富永佳与子, 2015, 「地域を幸せにする伴侶動物飼育支援システム—伴侶(家庭)動物との暮らしを地域活性へ」, ICAC KOBE 2015 記録集

〔伴侶動物との暮らしから見る地域支援策全体図(案)〕

理学的影響を考慮すれば、自立支援や介護予防として、「伴侶動物との暮らし」を積極的に社会システムに組み込む工夫は有用であると思われる。また、その他にも、入院の際の伴侶動物の預かり費用に限れば、将来的には民間の入院保険の活用可能性も考えられる。費用の手当ができれば、新たな産業分野を創出でき、新たな雇用の場も生み出すことになる。伴侶動物の分野では、専門学校で学ぶ学生も多く、伴侶動物と関わる仕事へのモチベーションは、とても高い。良質な人的資源も確保されている。

また、エイジレスフォーラム第13号「シニアのキャリアを地元に戻元できる文化の構想」(押味, 2015)でも取り上げられているように、高齢者は画的ではなく、実際には、身体能力、モチベーション、経済力等も様々である。高齢者は、支援を受けただけの存在ではなく、自分の出来る範囲で、支援を提供できる存在にもなり得る。

2. 地域コミュニティの中で

地域包括支援センターは、中学校区にひとつ設置されることになる。健康な人であれば、徒歩圏内であり、また、校区が存在することにより、住民の顔が見える地域コミュニティが活用されやすいことも想定される。

このような環境では、例えば、伴侶動物と暮らす健康な高齢者は、子ども達との触れ合いや、伴侶動物と暮らせない高齢者の訪問などを通じて、伴侶動物と共に主体的にコミュニティに関わることもできる。伴侶動物は、見知らぬ同士のコミュニケーションを繋ぐメディアとして機能するし、子ども達との関わりを通して、命の大切さ教育や子育て支援にも貢献できる。神戸市長田区で起きた女の子が犠牲になった事件では、犯人は、「猫を見せてあげる」と女の子を部屋に招き入れることに成功した。社会システムとして、コミュニティの中に、子ども達、高齢者、伴侶動物が居ることができ、それぞれに緩やかな見守りが実現できる場所が構築出来れば、子ども達をそのような危険から遠ざけ、高齢者が主体的に支援を提供する場ともなり、楽しく、優しく、温かなコミュニティを構築する一助となるのではな

いだろうか。そのような場の構築は、災害対策や孤独死防止にも有効に機能する。また、認知症高齢者のために、積極的に伴侶動物を導入している特別養護老人ホームもあり、飼育している伴侶動物と一緒に入居できる介護付き有料老人ホームも出てきている。これらの施設を通じた高齢者のコミュニティへの関わりも期待されるところである。それには、伴侶動物の専門家の適切な関わりと支援の役割が肝要である。

V. おわりに

伴侶動物の将来への不安がなくなり、伴侶動物と飼い主が納得して最後まで一緒に居られる社会システムが構築出来れば、老後の不安要素が一つ減り、伴侶動物と暮らしたい高齢者は、生き生きとして、楽しく満足した日常生活を、自らが納得できるまで、続けることができる。このような活動的で幸せな老後の生活イメージは、老後の明るいニュースであり、現役世代が持つ、年齢を重ねる不安を減らすことにも繋がる。

更に、伴侶動物への好感度は年々上がっており、本論で述べてきたような、「伴侶動物と暮らす高齢飼い主は、日常生活に満足し、ほとんど不満がない」とか、「伴侶動物と見つめ合うと、幸せホルモンが出る」といったような前向きな調査・研究結果が浸透してくれば、条件が整うのであれば、その潜在需要から考慮しても、伴侶動物と暮らすことを希望する高齢者も大幅に増えてくるであろう。

「伴侶動物との暮らし」については、これまで、漠然と「高齢者の暮らしにもいいのでは」というイメージで語られることが多かったが、近年、日本でも調査・研究が進みつつある。人類が長い歴史を経て獲得した異種動物との共生関係を今一度見直し、社会システムとして活用していくことは、未知の超高齢化社会の未来に立ち向かっていかねばならない我々人類にとって、自然の恵みとも言える大きな力と成り得るのではないだろうか。

高齢者のみならず、子ども達や地域住民も幸せに暮らすコミュニティ構築に貢献できるよう、社会保

険制度の活用、民間の保険や信託といった金融システムの活用、新規ビジネスの創造、ふるさと納税やクラウドファンディングのような新しい寄附手法の活用等、このような社会システムを支える自助、共助、公助の資金の仕組みも含め、「伴侶動物との暮らし」の活用戦略が更に広がる可能性を、引き続き模索出来ればと考える。

引用文献

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所, 2012, 「日本の将来推計人口2013 (平成25年1月推計)」, 国立社会保障・人口問題研究所プレスリリース
- 2) 内閣府政策統括官(共生社会政策担当), 2015, 「高齢者の日常生活に関する意識調査結果」
- 3) 環境省, 2014, 「動物の愛護及び管理に関する法律」最終改正:平成26年5月30日法律第46号
- 4) 環境省, 2013, 「災害時におけるペットの救護対策ガイドライン」
- 5) 内閣府政府広報室, 2010, 「動物愛護に関する世論調査」
- 6) 西澤亮治, 2014, 「飼い主の今を探る」, ICAC KOBE 2014 記録集
- 7) 西澤亮治, 2015, 「高齢ペット飼育者の意識調査」, ICAC KOBE 2015 記録集
- 8) Nagasawa M., Mitsui S., En S., Ohtani N., Ohta M., Sakuma Y., Onaka T., Mogi K., Kikusui T., 2015, 「オキシトシンと視線との正のループによるヒトとイヌとの絆の形成」
Oxytocin-gaze positive loop and the coevolution of human-dog bonds. *Science*, 348, 333-336
- 9) Watanabe T. et al., 2012, PLoS One, 7(6), e39561.
- 10) Nagasawa M., Okabe S., Mogi K. et al., 2012, Oxytocin and mutual communication in mother-infant bonding. *Front. Hum. Neurosci.*, 6, 31 [PubMed]
- 11) 湯木麻里, 2014, 「行政による犬猫の引取りから考える、幸ある社会の実現のためにできること」, ICAC KOBE 2014 記録集
- 12) 富永佳与子, 2015, 「地域を幸せにする伴侶動物飼育支援システム—伴侶(家庭)動物との暮らしを地域活性へ」, ICAC KOBE 2015 記録集
- 13) 押味忠雄, 2015, 「シニアのキャリアを地元に戻元できる文化の構想—健康寿命をできるだけ伸ばす—」『エイジレスフォーラム』13, 31-32